



つむぐ
紡ぐ

～みんなが元気に みんなが幸せに～

No. 9 5 平成31年 1月28日
南教育事務所 社会教育班

第2回学校・家庭・地域連携協議会 1/18

会場：県生涯学習センター

「学校を核とした地域づくり」を目指した、地域全体で子どもを育てる環境づくりを推進するための連携協議会が行われました。開会行事では、来年度の本事業について地域学校協働活動の大枠とその内容は変わらないという説明があり、学校と地域の連携・協働の一層の充実を図るために、これまでの「学校支援活動」の取組を「協働活動」として進めていくことについて確認しました。また、県生涯学習センターからは、社会教育行政の企業・民間団体等との連携・協働についての調査研究についての報告があり、年度末にはHPにアップされとのことでした。

続いて行われた対談では、「デザイン思考」について工学院大学見崎大悟准教授より講話があり、各地域で活動する関係者の活動のヒントとなるよう県生涯学習課の中山課長がその考え方をコーディネートしました。デザイン思考のプロセスにおける「共感」の段階では、「子どものような視点」で対象者をよく観察すること、また、「創造」の段階では、3～4人のチームでブレインストーミングの手法を用いて質より量を求めることが重要だということが分かりました。

午後のワークショップは、くじ引きで配置された席での4人1チームで、話合いを見える化する「グラフィック・レコーディング」の体験です。使用するマジックの持ち方や描き方等の基本を学んだ後、「絵しりとり」や「自己紹介」でアイスブレイクを行い、その後テーマに沿った話合いをレコーディングしました。自由な雰囲気の中で発言したことが可視化され、「何を話したか」が記録されていくことで話合いの内容が逸れることもなく、参加者の今後の活動へのヒントとなる体験でした。



社会教育アドバイザーコラム

積もった雪

社会教育アドバイザー 鈴木美津子

この冬も雪と格闘する日々が続いています。毎日降り続く雪を見てため息をつくのは大人だけで、歓声を上げて雪遊びを楽しんでいる幼児たちの姿を見ていると、思わず笑みがこぼれてしまいます。

先日、我が家の屋根から滑り落ちた雪が窓の高さまで達してきたので、晴れ間を見て雪寄せをしました。雪の塊にシャベルを入れると、中は雪の層ができていて、シャーベット状になったところはまるでサンドイッチのジャムのようなようです。場所ごとに違う雪の層を見てあれこれ想像しながら雪寄せをしたせいか、いつもは単純な作業も一気に終えることができました。

「わたしと小鳥とすずと」の詩で有名な童謡詩人金子みすずは、詩「積もった雪」の中で、「下の雪 重かるな 何百人ものせていて 中の雪 さみしかろな 空も地面(じべた)もみえないで」と積もった雪の中の様子にも心を寄せています。この詩に出会ったのは、今から30年くらい前になりますが、積もった雪をこのように表現する人がいたことに驚き、さっそく詩集と合唱曲集を買い求め、愛情あふれる詩の世界にひたった当時の思い出もよみがえってきました。

昔と比べれば便利になったとはいえ、雪国の暮らしは厳しく、雪を楽しむ余裕がない時もあります。降り積もる雪の下で春を待ちわびている庭の花々に思いをはせ、久しぶりに金子みすずの詩集を読み返しながら、短かった生涯の中で残した珠玉の作品を堪能した1月でした。

市町村事業訪問

冬休みに行われた魅力的な市町村事業を紹介します。

＜横手市冬休み子ども教室＞

横手市の長期休業中の子ども教室は、今年度15教室に増え、この冬から境町子ども教室も加わって16教室で実施されています。今回は、インターンシップとして横手城南高校の17名の生徒も参加し、六つの教室で自学自習の支援や体験活動のサポートを手伝いました。



境町子ども教室に参加した子どもたちは、小物入れ作りに取り組んでいました。作業の難しい所は、活動推進員や支援員の先生方からやり方を教えてもらい、丁寧に作品を作っていました。初めは遠慮気味だった3名の高校生も次第に子どもたちと打ち解け、作業を手伝ったり談笑したりしながら活動を楽しんでいました。

「普段は小さい子とふれあう機会がないので楽しかった」「将来は子どもと関わる仕事がしたい」と感想を話してくれた高校生にとっても、この経験は自分の将来や生き方を考えるヒントになったようです。

また、十文字西地区子ども教室では、手作り和紙でのはがき作りが行われました。地元の和紙職人である佐々木清男氏の指導を受けているコーディネーターや活動推進員が中心となって、早くから講座準備を進め、当日の活動を支えていました。伝統的な手仕事には手間がかかりますが、子どもたちは十文字和紙に寄せる大人たちの思いを受けとめ、真剣に取り組んでいました。「飾り付けが難しかったけど、きれいにできた」「和風な感じがシンプルでいい」と、互いの作品を見合う子どもたちは笑顔いっぱいです。地域に伝わる和紙作りの体験は、子どもたちにとって、心に残る思い出となったことでしょう。会場には、十文字和紙作りを総合的な学習の時間に取り上げている、地元の小学校の先生も参加していましたが、地域の教育素材を取り上げることで地域が学校を支え、学校も地域を支える連携・協働の望ましい姿を感じたひとときでした。



＜美郷町わくわくウィンタースクール＞

美郷町では、子どもたちの健やかな成長の一助となるような体験活動や学習の場として、夏休みと冬休みに小学生を対象にした「わくわくスクール」を開講しています。この冬休みには四つのメニューを実施し、その一つの「熱気球を飛ばそう」には28名の小学生が参加しました。

平成27年度から始めたこの講座は、JAXAとの連携によるコズミックカレッジです。内容には専門的な知識も含まれていますが、講師の俣野氏が低学年の子どもたちにも分かりやすく説明し、取り組みやすい内容を構成しているので、子どもたちは講師の問いかけに素早く反応していました。

町の支援体制も盤石です。四つのグループに町関係者が2名ずつ加わって活動を支援していましたので、はさみを使ったり薄いナイロン製の袋をセロハンテープで貼ったりする作業にも、子どもたちは難儀しないで取り組むことができました。完成した熱気球の大きさは、実に120cm×150cm。小さな子どもならすっぽり入る大きさです。ドライヤーの熱で膨らんだ五つの熱気球は見事に浮揚。会場には子どもたちの歓声が広がり、一人一人の表情は成就感に満ちあふれていました。普段はなかなか体験できない活動を通して、町ぐるみで子どもを育てているよさが伝わってきた取組でした。

